



## バルザックにどっぷり

松本 侑壬子・ジャーナリスト

フランス文学には疎い方だが、さすがにバルザックの名前や作品名はいくつか知っている。中でも、現代劇として映画化されたジャック・リヴェット監督「美しき諷い女」は画家とモデルの心理描写が実に面白かった。今回は、同監督が原作を忠実に映像化したとされる時代劇である。これまたパリの社交界での男女の駆け引きの心理が余すところなく描かれていて、どっぷりとバルザック的世界に浸った気持になる。

フランスの歴史や文学で特徴的なのは、「〇〇夫人」が当然のように恋愛ものの主人公であること。日本でもそういう例はないことはないが、それは社会的道徳的タブーを侵すことであり、大抵は死をもって償う形になる（最近ではありませんが）。大統領でも私生児や愛人を持ち、「それが、何か？」と反問できる国での恋愛は、日本などとは本質的に違うものなのだろうか？ という素朴な疑問は、本作を見ると氷解する。

映画の構成はサンドイッチ方式。最初と最後は、恋を失った男が姿を消した恋人を探し当て、今度こそと取り戻そうとするが…という話。その間に5年前の2人の恋の顛末が語られる。構成はシンプルだが、何という豪華で複雑でもどかしく切ない男と女の葛藤の物語であろうか。

最初の舞台は、1823年地中海スペイン領マ

ヨルカ島の修道院。フランス軍のモンリヴオー将軍アルマン（ギョーム・ドパルデュール）は、鉄格子越しに修道女テレーズ、実の名は元ランジェ公爵夫人アントワネット（ジャンヌ・バリバル）に再会する。2人は5年前パリの舞踏会で知り合った。

ナポレオン軍の英雄として名を上げた将軍に最初に近づいたのは公爵夫人である。無骨な将軍に戦争での冒険譚をせがみ、「続きは明日私の家で」と誘う。社交界の花である夫人に一目惚れした将軍は、彼女を自分の恋人にすると心を決める。だが、虚栄と欺瞞と金次第の社交界では、恋は損得勘定。いかに相手に惚れずに自分に惚れさせるか。秘術を尽くして仕掛ける恋のゲームこそ貴族たちの生き甲斐だ。時間をかけ、贅沢な衣装や舞台装置の中で押しやり引いたり騙したりの駆け引きを楽しむ。夫人はいつでもゲームの勝者だが、本当の恋などしたことがない。

だが、将軍にはそれが通じない。毎日ランジェ邸に通いつめ、思いの丈を吐露するが、夫人は「あなたは恋愛への配慮を一切無視した」、「愛の証」を求めれば「心を捧げたのに、あなたは野蠻にも私の体まで求めた」と嘆いたふりをして焦らす。

こうなると恋は真剣勝負の決闘だ。ついに将軍は夫人を誘拐し、罰として焼き鑊を彼女の額に押し付けようとする。もうゲームではない。夫人はこのとき初めて将軍を心から愛していることに気づく。だが、既に遅かった…。

失恋しても世間へは見栄を張る女、相手の気持ちにお構いなしの直情径行型の男の恋の危うさ。傍で見守る社交界の長老男女の言葉がさすがである。曰く「損得と感情の間で折り合いを」「恋に狂って捧げる命に値する男はこの世にいません」と。

## 『ランジェ公爵夫人』

仏伊合作映画(137分) / ジャック・リヴェット監督

4月5日より岩波ホール他 全国順次ロードショー

